

不登校

文部科学省の学校基本調査において、「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しない、あるいはしたくともできない状況にあるため、年間三〇日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの」を「不登校」と定義している。

平成十四年度の場合、那覇市立小中学校における不登校の児童生徒数は四三八人（小学校八十六人、中学校三五二人）にのぼり、その対策は緊急を要する課題となっている。

那覇市教育委員会では、不登校対策のためのネットワーク会議を整備することで、関係機関・団体・学校等との連携を進めるとともに、児童生徒への訪問相談や適応指導等を行っている。また青少年センターへの「教育支援室」設置（平成十五年一〇月）をステップに、平成十六年度には心因性以外の不登校児童生徒の支援をも目的とした「登校支援室」（仮称）を設置する準備を進めている。

支援員からの報告

今回の教育懇談会は、学校現場で実際に不登校問題と関わっている、那覇市立小学校三十五校の教育相談支援員や、学校長をはじめとする教育関係者らと、那覇市の五人の教育委員（教育長を含む）が一堂に会して開催され、那覇、真和志北、真和志南、首里、小禄の五つのブロックを代表して、各一名の教育相談支援員が、それぞれ抱えている不登校の具体的なケースやその対応、現状と課題等について報告を行った。以下、その報告の概要を紹介する。



〈小禄南小学校 宮城支援員〉

学校現場の経験がなく当初は不安があったが、青少年センターの先生方の助言等により励まされ、気持ち切り替えることができた。

本校には不登校傾向の児童が数人いた。いずれも担任の先生や保護者、養護教諭らとの連携と、クラスのお友達の協力ではほぼ毎日登校できているが、親のイライラが子どもを不安にさせる場合があり、親の子に対する接し方が非常に重要だと感じた。

当初は支援員の活動内容が不透明で共通理解が図れていなかった

が、今は校長先生をはじめ学校全体の協力体制のもと活動を進めることができている。ただ、週三日、一日四時間では時間が少なく、担任の先生らとの連携に不安がある。また、専用の相談室がなく、保健室を利用することもある。

〈神原小学校 又吉支援員〉

学校では校長や教頭、養護教諭、生徒指導担当らとできるだけ多くの時間をとって情報交換に努めている。先生方の協力も得られてありがたく思っている。

相談室に通っている子もいるが、休み時間には相談室を開放している。いろいろな子が遊びに来れるようにしている。このことが相談室に通っている子の友人関係を作ることにもつながっている。

出勤の回数が少ないので、相談室にポストを置いて、子どもたちに悩みを書いた手紙を入れてもらったりして工夫している。決められた時間の中でしか動けないので、支援員のいない間の活動については、手紙の交換や養護教諭に見てもらおう等協力してもらっている。

〈城西小学校 知念支援員〉

本校では、担任の先生が気がかりな子どもの様子を教頭先生に相